

# 25PB-pm282

## 早期体験学習を通しての地域薬局見学における学生の意識調査

○八軒 浩子<sup>1</sup>, 伊藤 栄次<sup>1</sup>, 中村 武夫<sup>1</sup>, 大内 秀一<sup>1</sup>, 和田 哲幸<sup>1</sup>, 松野 純男<sup>1</sup> (<sup>1</sup>近畿大薬)

【目的】入学後の間もない時期に、医療現場などを見聞することを通して、将来、目指す薬剤師像を明確にし、学習意欲を高めることを目的として、1年次に早期体験学習を実施している。とりわけ、薬剤師の活躍の場である薬局における薬剤師業務の見学は、地域医療への薬局薬剤師の役割および医療人としての態度を学ぶことのできる場の一つである。本学では大阪府薬剤師会の協力を得て受け入れていただいた各地域薬局に1年生を1~2名ずつを配属し、8月の上・中旬に2~3時間の見学を実施している。今回、学生の報告書を用い、地域薬局見学において学生が何を学んだかをテキストマイニングの手法を使用して計量的に分析を行った。

【方法】早期体験学習終了後に作成している報告書の原稿として、学生が見学レポートを新たに300文字程度に要約したワードデータをテキストデータとした。テキストマイニングソフトとしてKH coderを使用し、単語の出現頻度を数値化し、解析した。

【結果・考察】2012~2015年度の1年生628名の報告書についてテキストマイニングで解析したところ、上位頻出語は「薬剤師」「患者」「薬」「調剤」「コミュニケーション」などであった。また、それぞれの年度について共起ネットワーク分析を行ったところ、薬剤師業務を示すグループは2012年度では「コミュニケーション」のみであったが、2013年度では「服薬」「指導」、2014年度では「服薬」「指導」、「在宅」「医療」、2015年度では「服薬」「指導」、「信頼」「関係」のグループも形成された。これらのことから、薬局見学において1年生は「服薬」「指導」などにおける患者さんとの「コミュニケーション」の「大切さ」学んでいると判断できる。「在宅」「医療」や「信頼」「関係」から年度によって学生の受けた印象の異なることが明らかとなった。